
カラーリーブ

ダッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カラーリーブ

【Nコード】

N7588V

【作者名】

ダッチ

【あらすじ】

北海道程は私立紅葉学園もみじに入学することになった。
北海道程は私立紅葉学園もみじに入学することになった。
そこで、幼馴染みの東京太郎あづきやうたろうも含め個性的な友達が増えた道程。

そして、学校行事で1年に一度行われる「格付けレクリエーション」

格付けレクリエーションとは、紅葉学園が作った『カラーリーブ』と呼ばれる様々なゲームを取り込まれたゲームで、対戦ごとに違う

競技でクラス間で戦い、勝ち続けないと奴隷クラスになってしまう。
奴隷クラス回避のため、道程達は格付けレクリエーションで優勝を目指す。

新しい友達

——お父さんへ。

元気ですか？イギリスでの生活は慣れた？僕たち家族はお父さんが心配で仕方ありません。

電話でイギリスに着いたと言っておきながら、向こうとの時差が全くないのを知った時、お父さんはクビになったのかとヒヤヒヤしたよ。無事に仕事できてよかったね。なんで日本から列車でイギリスに着いたのかは深く聞かないけど、体を壊さないように気をつけてね。

あと、僕はこの春、高校生になったよ。通う学校は紅葉学園もみじっていう所で、キレイな学校だったし、いい高校生活が送れる気がしたんだ。単身赴任で寂しいだろうけど、僕も頑張るからね。

道程みちのりより。

「じゃあ、仕事に行く途中にこの手紙出しておいてね」

「はい。……ごめんね、道程。お母さん、仕事で忙しくて入学式行けなくて。導みちびきに頼もうとしたけど、あの子も大学あるし、休めないから」

「気にしなくていいよ。じゃあ、行ってきますっ」

「いってらっしゃい」

いつもより、ちょっと大きめに言って、門を出る。

高校生って、なんだか大人に一步近づいた気がするな。同じ中学で僕と同じ高校に通う友達はあるまいなくてちょっと寂しいけど、高校でもたくさん友達を（あわよくば彼女も）作って、高校生活をエンジョイできたらなっと、期待をのせて家から徒歩で約8分着く所にある紅葉学園に向かった。



校門をくぐると、もうたくさん生徒が集まっていた。

昇降口前に掲示されているクラス表で自分のクラスを確認しているからだ。

同じクラスになった人に話しかける人、中学から友達なのか一緒になって喜び合っている人、早速メールアドレスを交換している人と様々だ。

僕も確認しなきゃな。きたうみ北海道程だから、結構早い出席番号だったりするんだよねえ。

確認しようとしていると、

「よお、道程」

「おっす、京太郎」きょうたろう

幼稚園からほとんど同じだった幼馴染み、あづま東京太郎が話しかけてきた。

「3学期以来だな」

「そうだね」

中学2年の時、コイツと絶交をするという事件が起きた。その後は、自然と仲直りして、今はそうでもないが、未だにコイツの言うことは半信半疑だ。

「やつほー。君がみっちー？」

急に京太郎の後ろから女子が現れて、言われたことのないあだ名で呼びながら、近づいてくる。

「み、みっちー？ いや、そんなことより。誰だよ？ この美人さんは？」

その女子は肩まで伸ばした髪の毛の先に軽くパーマをかけていて、顔は端正に整っている。モデルをやっていると言われても不思議じゃない美人な女の子だ。それに、体からはほのかに香るいい匂いが

……

なんのボディークリームを使っているんだろう？僕なんて、固形石鹸なのに…………

「そうか。道程には紹介してなかったな。こいつは——」

「ワタシは長野佐緒莉。ながのさおり京ちゃんの彼女でーっす」

「か、彼女？」

ブサイクな京太郎に美人な女の子の知り合いはおろか、彼女ができていたなんて、明日の天気は雪で間違いない。

「お、おい、佐緒莉。あんまり、くつつくな」

「えゝ？だって、くつつきたいんだもんっ」

「あんな。学校でベタベタされっと、変な噂が流れたりしてだな」

「京ちゃん。ワタシが…………嫌なの？」

「いや、そういうことじゃないからっ、泣くなよ。なっ？」

「あれ？いつも、強気な態度の京太郎が長野さんの前では、ちょっと弱いぞ。もしかして、京太郎の弱点を握ったのか？」

「おいっ。心の中のセリフなんだろうが、ダダ漏れしてんぞっ」

「あれ？おっかしいな…………」

「まあ、いいや。お前には教えてやる。ちょっと耳かせっ」

「どうしたの？」

「いいから。…………あのな」

右手で口元を隠しながら、僕に耳打ちをしてくる。

「…………ここだけの話。佐緒莉の親父さんはな…………」

「…………うん」

「…………ヤクザの組長なんだ」

「…………なるほど。長野さんを泣かせたって僕がお父さんに言ったら、京太郎は死ぬのか」

「お前は俺を間接的に抹殺する気かっ!？」

「いったあ。ちよっと、耳元で大声ださないでよ」

「自業自得だ、ボケッ!」

何故か京太郎の機嫌を損ねてしまった。全く、これだから短気な元ヤンは…………

「あれ？京太朗」

ある男子が京太朗に話しかけてきた。

「んあ？……おおつ。剣壺^{けんいち}じゃねえかつ」

「あれ？知り合い？」

「お前にはこいつの紹介もまだたつたな。こいつは――」

「オレは青森^{あおもり}剣壺。京太朗の元恋人」

「うおいっ！公衆の面前で堂々と変な嘘をつくなっ！」

「京ちゃん、それって本当？」

「佐緒莉も真に受けるなっ！」

出てきた男子は、猫背で髪が長い、パツと見は寡黙に見える男子だ。実際、早口な上に声が小さいし。

「塾に通ってた時に一緒だったんだ」

「へえ、よろしくね。青森君」

「オレの事はケンイチでいい」

「そうか。じゃあ、よろしくね、ケンイチ。僕は北海道程だから――」

「ドウテイって呼べばいいさ」

「うおいっ！公衆の面前で勝手に恥ずかしいあだ名をつけるなよっ！」

昔はホツカイドウなんてあだ名があったけど、ドウテイとは呼ばれたことがない。

「おお、ケンイチ。そこにいたでござるか」

「なんだ？知り合いか？」

「申し遅れた。拙者は、大阪隼^{おおさなひゅん}でござる」

また、僕らの前に表れたのは、つり目に通った鼻筋、少し厚い唇に襟足の長い髪型のイケメンの部類に入る男子だ。だけど……

「小さいな……」

「な、それには触れないでほしいでござる。拙者、身長関してはコンプレックスなのでござるから」

「ああ、ごめんごめん」

180?ある京太朗の大体6分の5くらいの身長だった。そのせいか、イケメンだけど、小学生によくいるスポーツができそうなイケメンになっている。

「隼とはさつき知り合った。同じ組だからさ」

「そうか。何組だ?」

「1組でござる」

「それじゃ、ワタシ達と同じだね」

「僕も1組だ」

「ほうほう、なかなか賑やかなメンバーでござるな。よろしくお願いいたしまする」

「おう、よろしく。俺は東京太朗だ」

「ワタシは長野佐緒莉」

「僕は北海道程」

「よろしくでござる。京太朗、道程、長野殿」

早速、友達ができた。正直、友達ができるかどうか不安だったけど、安心できた。

「間違いなら申し訳ないのでござるが、長野殿は京太朗の恋人なのでござるか?」

「うん、そうだよっ」

「よく、気づいたな」

「それは、長野殿が京太朗にくっついてるから何となくで言ったのでござる」

「そうか」

「ジュンとかは、顔がカッコイイし、モテるでしょ?」

「ま、まあ……一応……恋人はいるでござるよ……」

「あれ?恋人の話をしている割には、浮かない表情だね」

「そ、そうでござるか? いたって普通の……」

「ちなみに、隼の彼女はこの学校の生徒——」

「ああ、いたいた。隼くん」

「うう、未緒……嫌な予感がするでござる」

「今日こそはこのメイド服を着てもらおうからね」

「い、いや。全力で拒否するでござるっ」

「待って」

ジュンが全力疾走してどこかへ行ってしまった。

「今のジュンの彼女さんと思われる人はだれ？」

「生徒――。もしかして、生徒統領？」

「そう。生徒統領の神奈川未緒。シヨタコン。学校説明会で隼を見て一目ぼれ。その日のうちに猛アタックし、付き合って欲しいって言葉を隼は交際する方とは思わずそのまま交際することになった」

「それって、さっき会った時に聞き出したのか？」

「それもあるけど、この学校について調べた時にたまたまゲットした」

「なに？生徒統領って？」

「いわゆる、生徒会長みたいなものだ。校内の人気投票で1位になった生徒が就けるポストだ」

「へえ、そんな決め方なんだ」

この学校のシステムについて理解したところ。

「あら？サオリン、ここにいたのね」

またまた新たな登場人物が現れた。今度は女子二人だ。一人は、水色のツインテールに八重歯が吸血鬼みたいにでている胸の大きな女子。もう一人は、黒髪でストリートが似合う大和撫子みたいな女子。二人とも長野さんと同じくらい美人だ。

「ああ、ミサミサになっちゃん」

「知り合いか？」

「うん。さっき知り合ったんだっ」

「でも、サオリンったら、彼氏を見つけた途端にどっかに行っちゃうんだもん」

「ごめんねえ、こっちがワタシの彼氏の京ちゃん。どう？カッコイイでしょ？」

「えっ？そ、そうね……」

「あまり、お気に召さないか？俺は東京太朗だ」

「アタシは秋田夏吞あきた なつお」

「私は福島未紗稀ふくしま みさき。よろしくね」

「ああ」

「よろしく、秋田さん、福島さん。僕は北海道程」

「オレは青森剣壺」

「（ジー）」

「ど、どうしたの？秋田さん？」

「ねえ、アタシのこと覚えてる？」

「えっ？覚えてるも何も、初対面じゃない？」

それに、僕は美人な女子の顔と名前を忘れることはない。

「そ、そう。勘違いみたい……おぼえて……んだ。バカッ……」

「そろそろ、教室に入った方がいいな」

「そうだね」

京太朗の言葉に僕達は教室に向かおうとした。その時。

「あ、やだ、コンタクト落としちゃった」

「大丈夫？みんな、踏まないようにね」

「あ、ありがとう。北海」

「いいよいいよ。これくらい——っ！」

「ん？どうした？道程」

「……きよ、京太朗。あれ、見える？」

「……あれってどれだ？」

「……あ・れっ！」

「……あれって——まさか、おいっ！」

「二人ともどうした？」

「……ねえ、ケンイチ。あれ見えてるの僕だけじゃないよね？」

「……あれって——あれって、マジかっ?!」

どうやら、目の錯覚ではないみたいだ。

「「……秋田（さん）にツノ生えてる……」」

——お父さん。僕の新しい友達はちょっと個性的です。

『下はトランクスですっ』

京太朗達と教室へ向かう途中。

「はぁ………はぁ………」

息を切らしたメイドさんが現れた。

学校にメイドって、文化祭じゃない限り、かなりエンカウント率の低い人種だ。

「………何があったんだ？ジュン」

「はぁ………大体、分かるでござろう………未緒にやられたでござるよ………」

「それで、肝心の神奈川先輩は？」

「拙者にこの服を着せたのち、入学式の打ち合わせがあると、拙者の制服を持ったまま行ってしまったでござる………」

「それは、気の毒なことだ」

「どうすれば、よいのでござろうか？このままでは、拙者はみなに変態扱いされてしまうでござる」

友人がかなりのピンチに陥っている。ここは、助けてあげなくてはっ！

「じゃあさ、こういうのはどう？誰かの専属メイドだって言い張るとか？」

「変態ってことを逆手に取ったわね」

「そうでしょ？秋田さん」

「しかし、根本的に解決していないでござるっ！」

「なら、自己紹介の時に、『下はトランクスですっ』と言うのは？」

「ナイスアイデア！ケンイチ」

「それは変態度を上げてはござらんかっ！？京太朗も賛同するなでござる。第一、拙者は禪ふんとしでござるっ！」

「「マジかっ！？」」

僕と京太朗とケンイチの声がきれいに揃った。

「ね、ねえ……………」

「だったら、みっちーに着せられたって言ったらどう？」

「それは、僕も誤解されるよっ！それなら、ケンイチってことに……」

「オレにそんな趣味はないっ！それに、着せたことはないが、脱がせたことはあるっ！」

「うっそだあゝ」

「あ、あの……………」

「嘘に決まってるだろ。ケンイチは嘘をつく和白目むくんだ」

「本当だあ。っていうか、なにそのシステムっ!？」

「いっそのこと、女って言えばいいんじゃない？」

「それでは、後々困るでござる」

「《おいっお前ら!》」

「「「……………はい」」」

後ろから、ドスの効いた声が聞こえる。あまりの低さに、背筋が凍りつく。

「《そろそろ、HRの始まる時間だ。行くぞっ!》」

「「「は、はい……………」」」

僕はその後、こう思った——っていうか、誰っ!？

「ああ、ミサはたまにこんな性格になっちゃうの」

「うん。二重人格ってやつ？でもね、人格が変わってる時の記憶は元に戻ると消えるの」

そ、そんな恐ろしい性格があるのなら、先に言ってほしかったな。初めて聞いた時は、走馬灯が見えた気がするよ……………

この後、僕らは何事もなかったかのように教室に着いた。男子メンバーは終始無言だったけど……………

まさかの百合っ!?

京太郎が大好きでえっちなことが嫌いなヤクザの娘、長野さん。

二重人格が怖い普段は大人しめの撫子、福島さん。

何故か僕と会ったことがあるというキバとツノが生えてる、秋田さん。

あとついでに、シヨタコンでマイペースなジュンの彼女で生徒統領、神奈川先輩。

……なんだか、この女子達だけでもお腹いっぱいだ。

僕はもしかしたら、女運が悪いのかもしれない。

「そろそろ、先公が来る時間だな」

ケータイで時間を確認する。今は、8時8分。入学式は9時からで、HRが8時10分からなので、京太郎の言う通り、そろそろ先生が来る頃合いだ。

——ガラガラッ

「うしっ、みんな席につけ」

席は出席番号順。僕も番号に合わせて席に着く。隣は………京太郎だ……

「ちっ、女子が良かったのに………」

「………お前は時々、心の声が露骨に口から飛び出すんだな」

どうやら、癖になってきているみたいだ。それにしても、こんな暑苦しい男が隣の席だなんて、ホントツ京太郎なんて「京ちゃん」に近いのやだあ」………死ねばいいのに。

「席に着いたか？俺も今年度からこの学校に転入して来た、体育の谷川傑だ。この学校についてはみんなと同じくらいの知識だ。お互い、頑張ろう」

担任の先生は爽やかな好青年って感じだ。よかったあ、あんまり堅かったり厳しそうな先生が担任だと、重いからなあ。

そして、谷川先生はクラスみんなの顔を覚えようとしているの

か、辺りを見渡す。そして――

「……………っ！」

視線が止まり……………

「お前、本気でメイドなのか？」

ジュンの所に颯爽と駆けつけた。

「誤解でござるっ、谷川教師！これは、深い事情があるのでござるっ！」

「……………そうか。セーラー服がなかったのか？」

「この学校の女子の制服はセーラーではないでござろうがっ！これは、彼女の」

「「まさかの百合っ！？」」

事態は現在進行形で悪くなってきている。

「……………そうだ」

ジュンが何か閃いたようだ。

「……………中は禪ふんとしでござるっ」

「「……………えっ？」」

性別問わず、僕らを除いたみんなのジュンへの謎が深まっている。

「とりあえず……………これ、俺の番号。まさか、こんな身長的女子高生に会えるなんてな…」

「誤解は解けてなかったでござるっ！」

渡された紙を勢いよく破り捨てるジュン。

この時僕が思ったのは、谷川先生が小学校教師じゃなくてよかった、っということだ。

三角関係ってこと？

「よし、次は学級委員長を決めよう」

——自己紹介を終え（ジュンの誤解は一応解けたことにしよう）、今度はこの話に乗り変わる。

「じゃあ、誰かやりたいやつはいないか？」

「「……………」」

教室に沈黙が漂う。そりゃそうだ。学級委員長なんて、メリットのない上になんだか面倒くさそうなポストに就きたがる人なんて、絶滅危惧種だ。

「……………誰もいないか」

概ね予想通りの表情を浮かべる先生。

「じゃあ……………推薦でもいいぞ」

「————（スッ）」

「————（スッ）」

「————（スッ）」

何て嫌な学級なんだっ。面倒な仕事を人に押し付けようとするなんてっ。

「誰にしようか……………じゃあ、北海」

僕もその中の一人だけだ。

「……………一応聞くが、道程。誰を生け贄にする気だ？」

「……………やだな、京太郎。僕の近くには適任者がいるじゃないかっ」

「……………おいっ、もしかして？」

「先生っ。僕は京太郎を推薦します」

「やっぱりか、畜生っ！」

「東か……推薦理由は？」

「京太郎には、この学校出身のお兄さんがいるんです。ですから、京太郎はこの学校について結構知っている方なんです」

「……それで？」

「はいっ、ですから、京太郎はこの学校で学級委員長はどんな仕事をするのか、密かに知っているはずですよ」

「ということは？」

「はいっ、それを押しつけたいんですっ！」

「爽やかな顔で言うセリフじゃねえっ！！明らかに露骨に本音を言っただろうっ！」

「そうさっ！そのどこが悪い？」

「開き直る気かっ！？」

「京ちゃん、頑張ってえ！」

「佐緒莉はちよっと引っ込んでろっ！」

「いいじゃねえか？他に誰もいないようだし……面倒いし——（棒読み）」

「別に誰がやったって同じだし、いいだろう……俺以外なら——（棒読み）」

「彼女も応援してるわけだしさ……死ねっ……オレも東MAX
アツマックス
に一票——（棒読み）」

「お前らも本心が抜け落ちてるぞっ！せめて、感情を込めて言えっ！！それと、勝手に変なあだ名をつけんじゃねえっ！！！」

「「東、死ねッ！！！」」

「違うっ！感情を込めて言うべきセリフは本音のほうじゃねえっ！流石の京太郎もツッコみ過ぎて、息が荒くなってきた。」

「ねっ？先生。京太郎って人望が厚いですよね？」

「明らかに妬み嫉みだと思う……でも、他にいないんなら——」

「待って先生。俺は道程を推薦する」

「お前っ！僕に面倒な仕事を押しつけるのかっ？！」

「……お前も同じことしただろうがっ」

全く、京太朗はいつも僕に嫌なことを押しつけるんだよなあ

「それで、北海を推薦する理由は？」

「道程は、細かい所によく気づくし、物覚えが早い。それに、クラスをまとめるのが上手い。このことから、道程の方が俺より遥かに適任だと思う」

出た。京太朗が僕を変に褒める時って、本気で嫌なことから逃げる時だ。長年、一緒にいたんだかたら、よく分かる。そっちがその気ならこっちだってっ！

「いやいや先生。僕は頭が良くて、運動神経が良くて、イケメンな京太朗がいいと思いますっ」

「いや。俺はバカで、運動オンチで、ブサイクな道程がいいと思う」

何故だ？ 奴の言葉からは僕を褒める言葉がどこにも見当たらない。長年の経験はどうしたんだ？

「そんなにいがみ合うのなら、ジャンケンで決めたらどうだ？」

「「その手があったかっ！！」」

「…………お前たちはどの手で決めるつもりだったんだ？」

「ようしっ、1回勝負。勝っても負けても恨みっこなしだ」

「その前に…………最初はグーだからね？」

「お前は俺がジャンケンのルールすら知らない男に見えんのか？」

「だって、幼稚園の時にさあ、『最初っからっ』って言ってズルしたじゃん」

「昔の話だろうが」

「幼稚園から高校まで一緒って…………」

「…………相思相愛か？」

「「んなわけあるかっ！！」」

「京ちゃん。もしかして、三角関係ってこと？」

「だから、違うに決まってるだろっ！」

それにその三角関係は、男を取り合うのが女と男という構図を取るから奇妙だ。

「もう、ちゃっちゃと決めよう」

「そうだね」

真剣勝負の前に、沈黙が走る。まるで、西部劇の決闘シーンみたいだ。鳥の鳴き声、車の音、隣の教室からの笑い声が聞こえてくる。

「——いくぞっ！」

京太朗の声でそれは始まった。

「「最初は——」」

僕は次の出来事を予想だにしてなかった。

「グー！」

「——ぶほっ」

——殴られた。やはり、あいつはジャンケンのルールを知らないみたいだ。

最初のグーはリズムを取るためにあって、決して拳じゃない。

そして、殴られた衝撃で、腕の筋肉が緩む。

「ジャンケン、ホイッ」

しかも、奴はまだ続ける気なのだ。

「俺がチョキで、道程がパー。つつうことで、学級委員長は道程に——」

「「「決定っ!!」」」

みんな、今の堂々とした不正行為を認める気だ。

みんな——嫌いだ。

どっちが重いと思う？

——ブクブク

なぜか、僕は今、水中にいる。だけど、息苦しくない。

そうか。これは夢か。……………そうに違いない。

あんまり覚えてないけど、京太郎に殴られたんだっけ……………

ってことは、今日を開けたら、僕は保健室のベッドの上にいるはずだ。

そして、秋田さんか福島さんが待っていてくれて、起き上がる僕に秋田さんが『大丈夫？』だとか、福島さんが『東くんってひどいね、私許せないっ』なんて、気の利いた一言を言ってくれるんだろ
うな……………

最低限、保健室の先生がいるかもしれない。

——ようしっ！目覚めろっ！道程っ！

——ガバッ

目を開けて起き上がる。すると目の前には——

「起きんの遅いぞ、道程」

……………加害者だっ！うえっ、何で僕の目の前に天使じゃなくて悪魔がいるんだろ。

——————待てよっ。目の前に加害者……………そうか。これは、神様が——

「僕に復讐のチャンスを与えたのかっ！」

「遺言はそれで十分か？」

「申し訳ありませんでしたっ！」

「道程にはプライドや信念などがなかったのでござるか？」

「そんなもの、命と一緒に天秤に掛けたら、どっちが重いと思う？」

「……………何かを悟られてる気分でござるが、何一つカッコよくない

でござる……」

でも、メイド姿のジュンの方が遥かにカッコは付いていないと思う。

「っていうか、ここはどこ？何で僕はベットにいないの？」

さつきから抱いてた疑問を京太郎に尋ねる。返答次第では、僕はコイツをシバキ倒すくらい権利があると思う。

「……………ベット？何言ってるんだ？ここは教室だ——っておいっ！何しやがるっ！」

——シバキ倒してやるっ！

「保健室に運べよっ！筋肉バカの渾身の一撃を顔面に喰らったんだから、罪悪感を味わいながら、ボクを保健室運べよっ！」

「誰が筋肉バカだっ！」

「今は、謝罪をしろと言ってるだけで、ツッコむ時じゃなくっ！っ！」

薄々感じてはいたけど、どうやら京太郎は僕にとって疫病神だ。

「あ、北海が起きた。随分元氣ね」

「北海くん大丈夫？」

そこに、秋田さんと福島さんが戻ってきた。

「はい、これっ」

「ああ、ありがとう」

秋田さんが、おそらく自販機で買ってきてくれたろうジュースを渡してきた。

流石、気が利いてるね。

——炭酸抹茶

そう、アルミ缶には表記されていた。

抹茶という苦くも深みのあるお茶にH₂CO₃はマッチしないと
思うんだけどな……………

「そうだっ。ねえ、京ちゃん。入学式までまだ時間あるし、色々京ちゃんの昔話とかしてよっ！」

長野さんがそんな提案をしてきた。時刻を確認すると、入場時刻まで15分ある。それくらいの時間なら、雑談してればつぶれるだろう。

「そうだね。じゃあ、僕が代わりに話してあげるよ」

「ホント？聞かせて、聞かせてっ！」

本当に京太郎が好きなんだなあ。興味津々に食いついてきた。

僕と京太郎が初めて会ったのは、幼稚園の時。つまり、出会ってもう13年が経とうとしている。

今まで、本当に色んなのがあったな。

——小学5年生の時、大人なスカートめくりで京太郎が挑戦した話。

「（ズンッ）——うっ……さ、佐緒莉……なぜ…俺の鳩尾に……」

「京ちゃんったら、オマセさんだったのね？」

——中学1年の時、女子のバス目を目測で当てっこした話。

「おいっ、お前はどっからスタンガンを出してきた？」

「生活必需品じゃない」

「んなもん、いらねえ——！！」（バチバチッ）——ぎゃああああああああ！！！」

——中学1年の時、バレンタインでチョコをくれた女子の顔を覚えて人には言えないようなお返しをどういう手順でするかについて——

「お前っ！最後のはフィクションだろうがっ！——おいっ！道程っ

！お前のせいで、佐緒莉がスタンガンの電圧を上げやがったっ！」

「——最後以外は本当なのね？」

「いや、それ以外も実はな——（バリバリッ）——ぬうううおおおおおああああ！！！」

そうだった。長野さんってエッチなの嫌いだったんだ。

「お前、わざとだよなあ？」

長野さんのスタンガン（100万ボルト）を喰らってもまだ立ち上がる京太郎。流石、日々体が無駄に鍛えてることだけはある。それなら、世界的に有名な電気ネズミの必殺技もへっちゃらだね。

「クロスッ！この世に存在するすべての殺人手段を駆使してお前をクロスッ！」

「やれるもんなら、やってみろっ！」

「二人とも、ストップ」

「「止めるなっ！ケンイチ」」

「っというよりは、タイムアップ」

「「えっ？」」

「もう、入場時刻でござる。ほら、行くでござるよ」

「京ちゃんも」

「佐緒莉、この際、腕を組むことは目を瞑ろう。だが、スタンガンはしまえっ」

「だって、ワタシの身に危険が及ばないように」

「お前は、自分の恋人にまでその構えなのかつ！？」

勝負はお預けとなった。まあ、いいか。

「ね、ねえ、北海」

「ん？どうしたの？」

「せ、せっかく、買ったんだから……飲んでほしいな」

「え？……ああ、炭酸抹茶のこと？そうだね。せっかく、くれたんだし」

プルタブを開けて、時間がないため、一気に口に流し込む。

——学校で吐いたのって初めての気がする。

メイドさんの恋人です

『新入生、入場』

中からの言葉と同時に、体育館に僕ら新1年生が入っていく。

響き渡る拍手と音楽は、この学校に入学してきたことを祝福してくれているようだ。

……と言っても、この学校は名前を書いたら入れる学校で落ちることはないんだけど。別に偏差値が低い学校ってわけでもないのに。

『校長先生は、今日は欠席の為、教頭先生からのご挨拶です』

「……………あれ？校長先生はいないの？」

「……………まあ、本当に用事があるのか、人前に出たくないかどっちかだな」

僕は少し頷き、その後眠ってた――――――わけなく、

教頭先生の話を終始聞いてた。睡魔と闘いながら。

『次に、生徒統領の神奈川未緒さんからのご挨拶です』

「……………ジュン、神奈川先輩だよっ」

「……………そうでござるな」

ジュンは誇らしそうにも、残念そうにも見える表情でいた。

『みなさん、入学おめでとうございます。生徒統領の神奈川未緒です』

さっき見かけた時より、ちょっと印象が変わっている。流石は生徒統領、普段と人前とで切り替えているのか。

『そこにいる、メイドさんの恋人です』

――ジュンに靴やタイピンが飛んできたことは想像に難くないだろう。

「なぜ、余計なことを言うのでござるかっ!？」

人生で初めて、グダグダな入学式に参加してしまった。



「ジュンはもう有名人だな」

「不名誉でござる……」

「あの後も、すごい数の罵声だったわね。特に上級生に。アタシ正直驚いたわ」

「それに、生卵が飛んできた時には、本当にびっくりしたけど、急に収まったよね。何でだろう？」

「「「……………」」」

「ごめん。それは、福島さんがやったことなんだよって、本人には言えないよ。」

「既に、隼宛てのラブレターと脅迫状が届いた」

「すごいカオス……………」

「でも、制服が戻ってきただけプラスじゃないか？」

「いや、皆の前で着替えさせられたのでござるよ？ 大いにマイナスでござる……………」

ジュンに普通の学園生活が戻ってくることは皆無だろうなあ。

「ま、人の噂も七十五日と言うし、いずれみんな忘れるだろう」

「そうだと、よいのでござるが……………」

「大丈夫。前向きに行こうよっ」

「そうでござるな」

——ガラガラッ

「みんな、席につけ。おら、そのメイドと愉快的仲間たちも」

「忘れてくれそうにないでござるっ！！」

今日は、ジュンが叫び続けている気がする。

似合うと思うの

——キーンコーンカーン

「よしっ、これで帰りのHRは終わり。委員長、号令」

「は、はい。えっと……さようなら」

「「さようなら」」

学級委員長の仕事その1、号令。ま、これくらいなら御安い御用
なんだけどなあ。

「んん、終わったあ」

伸びをしながら、帰った後、何をするか考えていた。

ゲームもいいし、漫画もいいし、京太郎達と遊ぶかカラオケもい
いし。

とりあえず、カバンを持って教室を出たその時。

「おい、北海。何処行く気だ？」

先生に呼び止められた。

「いや、帰るんですけど……」

「それはダメだ」

「え？何ですか？」

「学級委員長と副委員長は、自動的に総務委員会に入ることになる。
今日はその総務委員会の日だぞ？」

今日は、人生で一番京太郎が憎たらしく思えた日だ。



早足で総務委員会の開かれる委員会室へと向かう。

「ちょ、北海君待って」

副委員長が福島さんという、完全に喜びきれない状況だけど。

「早いってばっ」

いつなんどき、福島さんの人格変化が起こるか分からない。早足

の方が危険度は少ないかな。

「《待てって言ってんだろっ!!》」

「すいませんでしたっ!」

どうやら、怒りに触れたみたいだ。なんとなくの直感だけど、福島さんの人格変化は、基本的に感情が大きく動いた時に起こるのではないかと思う。そうでない時もあるけど。摩訶不思議だ。

「(フツ)——ここが総務室?もう着いたの?」

「そうだね。意外と近かったね」

ただ単に福島さんの記憶にないだけだよ。人格が変わった時の記憶が。

「まあ、さっさと終わらせて帰ろう」

——ガラガラツ 勢いよくドアを開ける。

「お、キミ達は1年生かな?」

「あ、はい。そうです」

話しかけてきた女の先輩は、ボーイッシュという言葉が似合う先輩だった。つまり、スカートよりもズボンが似合いそうだ。

「おれは岩城伽耶^{いわき かや}。1年生は、あの席に座って」

「あ、はい」

岩城先輩の一人称に疑問を抱きながらも、席に着く。

机は、長机で一つで三人くらい座れそうなタイプだ。

どうやら、一クラスに着き一つみたいだ。この学校でお金持ちなんだな。

「あ、あの……福島さん?」

「ど、どうしたの?北海くん」

「そ、その……近くない?」

「そうだね。ここからだ、と、黒板の文字がはっきりと見えそうだね」

「いや、僕が感じてる違和感は机と黒板との距離じゃなくてさ……」

…僕と福島さんとの距離」

「いやいや。出会ったばかりでも、ちゃんと恋愛には発展できるよ。ビビッと婚って遺伝子レベルで結ばれている証拠らしいんだっ

て」

ダメだ。話を聞きつつもかみ合っていない。キャッチボールで言うなら、フライをゴロの構えで取る感じだ。

「それに、別に、不意について、イタズラしちゃおうとか毛頭ないよ？」

「なんで、そんなことしようとするのっ!？」

「あとあと……」

あ、一人で暴走してるだけだ。

「あの、岩城先輩」

「ん? どうした？」

「ちょっと、トイレ行ってきてもいいですか？」

「始まるまであと15分だし、いいよ」

「ちょっと待ってっ。置いて行かないで」

「いや、ただトイレに行くだけだよ」

少し福島さんが落ち着くのを見測るためだけだ。

「なら、私も行くよ、一緒に」

「なぜか、その言い方だと、同じトイレに入る雰囲気なんだけど……」

……ダメでしょ」

「大丈夫。きっと、北海くんはスカートが似合うと思うの」

「僕は決して女装しないよっ!？ ジュンじゃあるまいし」

「じゃ、ここにいて、ね？」

「だ、だけど……」

「《いいから、ここにいろっ!》」

「分かりましたっ! 申し訳ございませんっ!」

「(フツ)——あれ? なんで、北海くん。土下座してるの？」

「世の中には知らない方が幸せなこともあるんだよ……」

「あ、ごめん。北海君」

「はい? どうしました？」

「メンバー揃ったし、もう委員会始めてもいい?」

「……………どうぞ」

この後、やはり、福島さんとの（物理的な）距離を感じながら委員会に参加した。

残酷すぎるっ！

「京太郎」

「どうした？」

「今度やる、格付けレクリエーションって知ってる？」

「ああ、クラス間である競技で戦い、トーナメント式で優勝したクラスから順に『格』をつけられる。確か……皇帝、貴族、富豪、上流、中流、下流、貧民、奴隷といった感じだ。下のクラスは上には逆らえないし、上のクラスほど優遇されるらしい」

「ある競技って？」

「それは分からない。カラーリーブつう、この学校で開発されたハードウェアに入ってる競技のアプリケーションの中からその場でランダムで選ばれるんだ」

「そういえば、お兄さんもやったんでしょ？」

「ああ。兄貴は二位だった。別に、だからって訳じゃねえが。俺はマジで優勝してえっ！」

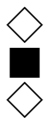
確かに、奴隷クラスになって、一年間を最低な学園生活にしたいはない。

「でも、なんでそんな名前なんだろうね」

「確か、校長が名前を考えた時、落ちてくる紅葉が血に染まっている感じに見えて、戦うにふさわしいって思ったと兄貴が言ってた」

「それって、最悪じゃないかっ！ってことは、この学校の名前も？」
「……勢いで、カラーリーブつまり、紅葉って名前を付けたんだろうな」

自分の通う学校の由来が残酷すぎるっ！



その日の朝のHR。

格付けレクリエーションでは、出場最低メンバーが8人になる。学級委員長と副委員長は絶対参加だから、あと6人必要だ。

「やりたい人いる？」

僕がクラスに問いかける。

「「「—————」」」

上げている人を確認する。

「えっと……京太郎、長野さん、ジュン、ケンイチ、秋田さん」と

用紙に以上5名の名前を書き込む。

「他には？」

あと一人足りないから、再度聞いてみる。

——ザワザワッ

教室がザワつき始める。

『どうする？』

『負けたら、責任重そうだよなあ』

『ああ、おれはやりたくない』

『俺も』

みんな、参加に意欲がないみたいだ。彼らの言い分がよく分かる。確かに、もし負けてしまつてそのせいで奴隷クラスにでもなつてしまつたら、責任重大だ。僕もみんなの立場なら、立候補はしない。

「どれ、道程。俺に代わってくれ」

「あ、うん」

京太郎が教卓の前に立つ。最初っから、お前が学級委員長やれば良かったのに……

「別に最低8人必要なだけだ。出場人数によつては、全員参加つてもあるんだ。そう重く捉えなくてもいいんだぞ？」

『『『……………』』』

今度は黙り込む。しかし、誰かが名乗り出る気配はない。

「よし、これ以上やっても平行線だ。これならどうだ？」

京太郎が少し胸を張って言う。

「ゲームに出るメンバーを決めるんだから、ゲームで決めようじゃないか」

『どうする気だ？』

「競技内容はこうだ。5分間の内に道程を少なく殴った奴が出場する」

「なぜ、僕を巻き添えにするっ!？」

「道程、静かにしてろっ!」

「この状況で静かに出来るわけないだろっ!？」

そんな野蛮な競技を胸を張って提案するな。

『よし、ならそうしよう』

『これはあくまでゲーム。あくまでゲーム』

『運動不足の——（パキパキッ）解消に——（ポキポキッ）なりそうだ——（ボキボキッ）』

「みんなっ!やる気満々な意味が分からないっ!クラスメイトを殴るんだよっ!？そこっ!早速、机を前に移動させないっ!」

「女子は危険だから、参加しなくていい」

「さっすが京ちゃん。優しいんだねっ」

長野さん。騙されてるよ。女子は戦力にならなそうだから外したんだよ。

「うしっ、みんな準備はいいか？」

『『『おおー!!!』』』

死刑執行が刻一刻と迫ってきた。……待てよ?クラスは全員で50人。僕を引いて49人。女子23人を引いて26人。京太郎、ジュン、ケンイチを抜いて23人。

……23人が僕を一斉に殴りかかるなんて、ただの事件だよ。

「よーいつ、はじめっ!」

『『『いくぜえー!!!』』』

ああ、悪夢を見ているようだ。

「やられてたまるかっ!」

素早く、最初の攻撃を避け、ドアに向かってまっしぐら。教室を

出れば、殴られる確率が低くなるだろう。

僕はドアを開け、逃走体形に入った。

——目の前にあったのは、細い脚……そのままを見上げると。
「東が、女子は男子の殴ってる数を数えてって。んで、危ないから廊下にいてついでに北海の逃走を阻止しろだって」

「退路を断たれただどっ!？」

「俺に抜かりはないっ!」

「褒めてねえよ、バカッ!」

「それと……北海……アンタさつきから……何見てるのよ?」

「えっ? 何って?」

「だから……アタシの…パ……パ……」

「パ?」

パから始まる言葉を脳内で古今東西ゲーム

——タンタン パン

——タンタン パンダ

——タンタン パンツ

——タンタ………あっ!

この体勢だから、秋田さんのパンツがもろに見えてたんだ。

「ご、ゴメン。でも、見てないよっ。決して、秋田さんのクマさんパンツなんてっ」

「犬よっ! バカッ!」

「ごふっ!」

みんなに殴られる前に秋田さんに蹴られた。……しかも顔面。
でもね、間違っても訂正の必要はないと思うよ……

僕はこの後、ひたすらみんなに殴られる感覚を味わい続けた。
今度みんなに『情け』という感情について講義を開きたい。

墓を作るぞっ！

「結果は、23発の最上だ」
もがみ

「おれかぁ」

悔しそうなアクションを取る最上君。悔やむのは自分のクラスメイトを23発も殴ったことを悔やんでほしい。

「よし、道程。書いてくれっ」

「分かったよ……」

こちらとら、合計1000発以上も拳を喰らってフラフラしてるのに、他人事みたいにしやがって……だけど、ただで転ばないのが僕、北海道程。

京太郎が油断してる隙に僕の復讐の一撃を——

「ケンイチ、校庭に道程の墓穴を掘ってきてくれ」

「了解っ」

——味あわせる隙はなかったみたいだ。

「どうしたのさ？京太郎、急に冗談なんか言っちゃって」

「お前のその右手がどうも冗談に見えなくてな」

「何の話？」

「とぼけると、墓をアイスの棒にするぞ？」

「まず、僕を殺すことを前提としていないかいっ!？」

「違う。生き埋めだ」

「どっちにしたってよくねえよっ!！」

「まあ、冗談はここくらいにして」

「……本当に冗談なのか？」

「一週間後は格付けレクリエーションだ。競技によって、アンタらも出場する可能性もあるが、基本的に俺達に任せておけっ!」

『『『おおおおー!!』『』『』』』

クラスの士気が高まった。意外と京太郎はこういうの得意なんだよなあ。

「負けたら、その時こそ道程の墓を作るぞっ！」

『『『おおおおー!!』』』

「賛同するんじゃないっ！」

ただ、僕にとってはやっぱり疫病神にしか見えないけど。



一週間後。今日がその日だ。

「行ってきます」

誰もいないけど、そう言って門出る。

「おっす、道程」

「おはよう、京太郎」

僕と京太郎の家は大体4〜500メートル。割と近い。

「いよいよ今日だ」

「そうだね」

「まあ、緊張することはないさ。お前はゲーム好きだろ？」

「まあね。そう考えれば、楽しくできそうだ」

「そういえばさ、昨日佐緒莉がよ——」

おもむろに京太郎が話題を変えた。

「——それで、佐緒莉の奴——」

「……………」

「——佐緒莉ってば——」

「……………」

黙って聞いてみるけど、段々イライラしてきた。

「——そしたら、佐緒莉が言ったんだよ——」

「うわわわわわわわわ!!」

のろ気話に居たたまれずに、猛ダツシュした。

「……………何だ? アイツ」



「ぐすぐすっ……京太郎なんて……」

「教室に入ってきていきなり何でござるか？道程」

「道程は情緒不安定なのか？」

「うっうっ……ブツブツブツ」

「なんと言っているのか分からないでござるよ……」

「もうちよっと、声のボリュームを上げてゆっくりと」

「……それは、剣壺が言えることではないでござる」

「……確かに京太郎は頭も良いし、運動神経もいいし、人から頼られやすいよ？」

「いいことではござらんか。自分の友人が非の打ち所がない人であることは」

「……でも、長野さんなんて彼女はできないと思うんだ」

「……いや、さっき褒めてたでござらんか」

「僕と京太郎で何が違うんだよっ」

「頭と運動神経とルックスと性格が格段に違うっ」

「剣壺、いよいよ道程がベランダに身をのり始めたでござるっ！そこまで言う必要はないでござろうっ！」

「そういうつもりで言ったわけでは——」

「おはよう、大阪、青森」

「おお秋田殿」

「おはようございます」

「福島も来た」

「あの、北海くんは何をしているの？」

「北海く。ベランダで遊ぶ時は、落ちないように気を付けなさいっ！」

「秋田殿、まさに道程は落ちようとしているのでござるが………」

「えっ？そうなの？」

「他に何をしていると思ってたの？」

「い、いや……とにかく、止めないっ」

『離してくれっケンイチ。僕の短い人生、ここで終わらせた方がマシだっ!』

「青森くんの対応が早いおかげで助かったみたい」

『……………』

「何を話しているの？」

「青森くんは普段から声が小さいから、ここだと聞き取りづらいね」
「あっ、道程が戻ってきたでござる」

「……………（グツ）」（↑ケンイチが親指を立てる）

「（（何を話した「のよ？」のかな？）でござるか？）」

「……………ごめんみんな」

「まあ、北海くんが無事でよかった」

「そうね。今度からは気をつけてよね」

「……………うん」

「……………道程になんて言ったでござるか？」

「……………どうしても性的表現が入るけどいい？」

「……………遠慮するでござる」

「お前ら何してんだ？」

「京太朗」

「おっはよう、みんな」

「サオリン」

「大方、道程が飛び降りようとしていたのをケンイチが止めて今の状況だろ？」

「何で分かるのよ？」

「簡単な話だ——今朝、道程は突然叫びながら走り出した。おそらく、佐緒莉の話をしている俺に嫉妬して逃げたんだろ。落ちこんだ道程は慰めてもらおうと拗^すねる。ジュンが道程を慰めるが、ケンイチはそんなことはしない。だから、はっきりと言った言葉に道程がショックを受けて、出来もしない癖に飛び降りようとして注目

を集めようとする。ケンイチはそれに気づいてはいたが、本当に飛び降りるのを阻止したいから止めに入ったって所だろう」

「「……………」」」

「どうした？ハズレか？」

「……えは……お前は魔法使いかつ！」

「それは、正解と解釈していいんだな？」

「すごいね。東くん、探偵に向いてるのかも」

「そうか？」

「じゃあ、ワタシは助手するね」

「…………別に進路が決まったわけじゃなえんだが」

「くそう、やっぱり京太郎を痛みつけないと気が済まないっ！」

「この前、黙っててもできなかったのに、宣言したら余計無理だろ」

「そんなことはな——うっ、離してくれっケンイチ。僕はこの男を殴りたいんだ」

「返り討ちに遭うだけ」

「そういうこった。よく、分かったな」

「道程は、冷静を失うと後先を考えずに行動することが多い。戦車に全裸で立ち向かうくらい無茶をする」

流石にそんなバカな無茶はしないよ。

「それに、もう先生がきた。タイムアウトだ」

「くっ…………命拾いしたなっ！」

「…………それは俺のセリフだ。それに、そのイライラを今日の戦いにぶつけたらどうだ？」

「……………そうする」

僕はしぶしぶ京太郎の提案を受け付けた。

初めの戦い

『いよいよ始まりましたっ！格付けレクリエーションッ！司会進行は私、大津が務めさせていただきます。早速、開会式————
——はぶっちゃけ面倒なので、すつとばします』

「すごいわね。全教室同時生中継だなんて」

「おまけに、教室のテレビは最新型で、3Dに切り替え可能な上、メガネは不要」

「下手すれば、公立の学校より安い学費なのにね」

「そういえば、さっきの中継でクレーンを使っていた気がするでござる」

「結構、お金持ちなんだね、京ちゃん」

「そりやそうだろ。なんせ、この学校を創設した現学園長は、家城やしろう鐘秋かねあきだからな」

「誰それ？有名人？」

「北海……そんなことも知らないの？」

「ええっ？」

なぜか、秋田さんに呆れた目で見られる。

「北海君は新聞とか、ニュースとか見ないの？」

「見てるよっ」

「嘘つけっ！道程はどうせ、見る新聞はテレビ欄で見るニュースはエンタメ系だからな」

「失礼な、抜け落ちてるよ」

「何が？」

「………4コマ漫画が」

「死ねっ！カス！」

「うわああゝん。幼馴染みに罵倒されたあゝ」

「落ち着くでござる」

「道程、お前も間違えてるぞ」

「どこが？」

「お前は俺の奴隷だ」

「ひどいっ！クラス間に階級をつける前に、クラス内で階級をつけやがったっ！」

「まあ、俺達が皇帝クラスになれば、お前もそこそいい地位になることだし、頑張ればいいじゃねえか」

「京太郎は僕を励ましたいのか、罵倒したいのかどっちなんだよっ！」

僕の幼馴染みはイマイチ信用にかける……



僕達の出番が来たので、クラスで戦闘室に向かう。

戦闘室なんて名前の部屋がある学校なんて、日本中、世界中探してもここくらいだろう。

戦闘室は、広さ的に言えば、教室3つ分くらいだ。だから、生中継をするってのもある。

『続いて、1組対3組の試合です』

「両組の学級委員長は前へ」

1学年主任の山岡先生やまおかの指示により、前へ出る。

「1組かあ、いいよなあ、俺らのクラスなんか、女子がいねえのによぞ」

「そ、そう。それは気の毒だね」

女子がいらないからなのか、そう見えるから女子を入れなかったのかは分からないけど、3組学級委員長の山形猛君やまがたけしはホラー映画に出て来そうな見た目をしている。

「握手をどうぞ」

本音を言えば、したくねえ。

「その必要はない！」

しかも、断られた。

『それでは、競技を決めるルーレットにいきましょう』
中央のモニターが変わり、競技名が高速で入れ替わる。

——ポチ

山岡先生がボタンを押した。すると、段々とスピードが落ちてくる。

——ピッピッピッピッ

もう勢いはなくなり——

——ピンッ！

決まったようだ。

『競技はスーパードッジボールに決まりました』
競技は一度も聞いたことのない名前だった。

「ルールを説明する————」

この競技は8人で行う。

ボールは2個あり、始まりの合図と共にセンターラインにあるボールを取りに行く。その際、自分のコートの半分を超えてからでないと、攻撃はできない。

ボールに当たり、そのボールが地面に着いたらアウト。

アウトになった場合、アウトプレイヤーゾーンに転送される。

ボールを持った相手をアウトにした場合、自分のチームからアウトになった選手が一人コートに戻ることができる。——————以上だ。質問は？」

みんなは大丈夫な表情を浮かべる。

「それでは、スターティングメンバーはフィールドに立つこと」

部屋の真ん中にあるガラス張りの床の上に立つ。

全員が立ってから数秒後、床が光り、吸い込まれる感覚が体中に巡る。

気がつけば、スーパードッジボールのコートの上に立っていた。
僕から見て左にあるモニターから1組みんなの姿が見える。どうやら、ゲームの中に入り込んだみたいだ。

「道程」

「どうしたの？」

「お前には、最初ボールを取りに行ってほしい」

「別にいいけど、だったら、もっと足の速い人の方が良くない？」

「いや、道程くらいがちょうどいい。あと、今から言うことを聞いてくれ」

「何だよ？」

京太郎が僕に耳打ちする。

「いけるか？」

「まあ、大丈夫だけど」

『準備は整いましたか？』

司会進行の声がどこからともなく聞こえてくる。

「それでは、スタートッ！」

先生の合図と共に僕らの戦いが始まった。

スーパードッジボール1

『スタートッ!』

「うおおおお!」

始まりの合図がついに鳴り響いた。

それと同時に全力で走る。相手も、一人が懸命に走ってくる。ちよつとの差で僕が勝ってる。ま、フライングギリギリだったからね。

「もらったあゝ!」

僕は一足早くにセンターラインに到達。そして――

「――(クルッ)」

「………はっ?」

すぐさま、振り返った。相手からしたら、何しているんだろう、と思っっているとこだろう。

「京太朗、頼むぞっ!」

――バチンッ

そして、思いつきり、京太朗目掛けてボール一つをシュート。別に自分のコート半分を超えてからじゃないと、投げちゃいけないだけで、それまで蹴っちゃいけないなんてルールはない。

よくドッジボールのルールで内野内でのパスは禁止なんてのもあるけど、これはパスじゃない。言ってみれば、相手にボールを当てられ、ワンバウンドする前に味方が取ってくれるようなもんだ。

「よっしゃっ! 来いっ!」

審判からの反則指摘はないから、これは一応ルールの範囲なのだろう。そして、京太朗目掛けて蹴ったボールは――

「(ポンッ)――いてっ」

僕の頭上に落ちた来た。

「あのバカッ! 何してんだよっ!」

「道程。急がないと、相手からの攻撃が来る」

「あ、ヤバイ」

とりあえず、自分の陣地に転がってるボールを抱え、すぐにハーラインを越える。

「俺達にパスはできないから、道程。お前がやれっ！」
「分かった」

ラッキーなことに、ボールを取りに行った相手は僕の珍プレーを前に笑い転げていた。くそう、思いつき甚振りつけてやりたい。
「うおおおお！」

そして、僕の投げたボールは。

「ぐほお！」

京太朗の鳩尾に命中した。

「てめえ、何しやがるっ！」

「甚振りつきたい相手を間違えたんだよっ！」
「微妙に開き直ってんじゃねえっ！やっぱ、お前は当てにできねえ！」

京太朗は落ちたボールを拾い上げ、

「喰らえっ！」

未だに笑い転げてる相手に向かって投げる。

「うそっ？」

見事、京太朗の一撃は命中した。

『三組ゼッケン五番アウトッ！』

その途端に、五番の人はあっという間に僕らから見て左にある、アウトプレイヤーゾーンに転送された。

「く、あんな奴にやられるなんて」

ホント、自分の運動神経と京太朗が恨めしい。

「よっし、これで一人目」

「さっすが、京ちゃん！」

「さ、佐緒莉……この状況でくっつかれると、マジで困る」

「ええ〜??」

「よそ見してる場合か？」

すると、相手は二人で一つずつボールを持ちながら、攻撃態勢に

入った。

「どうしよう？二人一辺にこれらたら」

「大丈夫だ。同時に投げると、ボール同士がぶつかる可能性がある。この場合、時間差攻撃が最善だろう。それに、俺達にボールがない以上、避けることやキャッチすることに専念できるだろう？」

「なるほど」

「行けッ！」

「喰らえっ！」

案の定、時間差攻撃だ。しかし、狙いはどちらも京太郎だ。確かに、僕も敵だったら京太郎を先に狙うだろう。賢明な選択だと思う。京太郎は、一つ目に迫るボールをいとも簡単に避けた。そして、迫りくるもう一つのボールを。

「頼んだっ！」

僕を盾にして防ごうとしている。

「うおおおい！早速、チームプレーを乱す気かっ！？」

「前を見ろっ！」

「えっ？——ぶほっ！」

顔面強打。で、でも——これならもしかしてセーフかもしれ：

『一組ゼッケン一番アウトッ！』

顔面セーフがないとは、さすがスーパードッジボール。

もちろん、すぐにアウトゾーンに強制送還だ。

「これでもし負けたら、お前のせいだからなっ！」

「大丈夫だ。お前の犬死には無駄にはしないっ！」

「犬死って言葉自体、無駄死について意味なんだよっ！」

初めて京太郎に言葉の意味を教えた時だった。

スーパードッジボール2

「うおうりゃっ！」

「せああああ！」

激しい攻防戦が続く。ボールが2つなだけに迂闊に動けないはずなのに。

ボールを取って投げ、すぐさま来たボールを避ける。こんな構図が繰り返されている。

3組の学級委員長・山形君を筆頭に攻撃に専念するものと、ボールをキャッチすることに専念するものとを分けている。

一方、僕ら1組は京太郎を中心にジュン、ケンイチ、長野さん、秋田さんがひたすら受けたたり攻めたりしている。

最上君にはあまりボールは来なく、福島さんは運動が苦手なのか、受けるどころか、避けることで精一杯のようだ。

「くっそっ、これじゃあ埒が明かねえっ」

京太郎の言う通りで、現状はイタチごっこだ。決着がつく気配はない。だが、あの京太郎の言葉は相手を僅かに挑発しているのだ。

「息が上がってきたようだな」

山形君が京太郎達の変化に気付いた。

「これで二人目だっ！」

今までよりも速い球を投げてきた。狙いは――

「くそっ、避けるっ！福島っ！」

この中で一番当てやすいであろう福島さんだった。

「えっ？ど、どう……」

しかし、避けるのが精一杯だった福島さん。一番速いあの球を避けられそうにない。

僕らは出来る限り祈った。

「う、うう………《でやあああああ！》」

――バゴンッ！

「出たっ！」

人格変化の福島さん。彼女の強気な性格なら、この状況をなんとかするだろうと京太郎は見越していた。

そして、人格が変わった瞬間に福島さんが思いっきり殴りつけたボールは――

――ヒュー

すごい、勢いで…

――バンッ！

相手コートの壁に当たり……

――トン

弾んだ後、相手コートの半分くらいで落ちた………

『1組ゼッケン2番アウトッ！』

「《なにいつ！？》」

結果は変わらなかった。

そして、ここに来た福島さんは――

「《くそう、どうして、あんなことしたんだ？》」

人格を元に戻さないまま、相当悔しがっていた。

試合はそこから少しずつ展開していった。

1組では、最上君、ケンイチ、長野さんがアウトになり残り3人。

3組は二人しかアウトにできなく、残り5人。

こちらが不利という状況に陥った。

「スキありっ！」

「なぬっ！？」

『1組ゼッケン5番アウト!』

すると、今度はジュンがアウトになってしまった。

「かたじけないでござる」

アウトゾーンでそう謝る。

「どうしようね。こっちは秋田さんと京太朗。向こうは5人もいるよ」

秋田さんが心配になってきた。今まで見たきて気づいたことは、秋田さんの運動神経が高いつてことだけど、やはり女の子。相手が全員男に対して、スタミナが足りない。

京太朗については、まだ心配する必要はないけど、一人になってしまったら、流石に勝ちづらくなる。

「人数的には不利とはいえ、こっちはボール2つを所持しているの
でござるから、まだ分からないでござるな」

そう、こっちはボールを二人がそれぞれ持っている。逆転の兆しはまだあるということだ。

「秋田、今から言うことを聞いてくれ」

「え、なに？」

どうやら、なにかしら作戦があるようだ。

「よし、いくぞっ!」

「う、うん」

結構、早めに作戦会議が終了した。

「せああああああ!」

突然、京太朗は叫びながら、大ジャンプした。

「なにする気だ？」

「気をつけろっ! アイツ、本気出してきたぞ」

「くらええええっ!」

力が出る限り、というような感じで思いっきりボールを投げる。

行き先は――

「ダメだ。壁にぶつかるよ」

「よっし、ボール1個ゲットだっ!」

壁にぶつかるのは、床でワンバウンドするのと同じだ。

つまり、壁にぶつかってからだとキャッチに失敗しても、アウトにはならない。

力をつけすぎたようだ。

——バンッ！

案の定、ボールは壁に激突。そのまま跳ね返る。

「もらったっ！」

3組の生徒が、ボールをキャッチした。これじゃ、余計不利になった。

「よそ見してていいのか？」

すると、京太郎は楽しげな声色で喋った。

「なにっ!？」

3組全員が1組コートを見る。

「当たれっ！」

すぐに秋田さんが出来る限りの力でボールをキャッチした相手に投げつける。

「くそっ！」

秋田さんの攻撃は見事命中した。

『3組ゼッケン7番アウト!』

「くう、小賢しい」

「頭脳プレーと言ってもらおうか？」

「カッコイイ！京ちゃーんっ！」

確かに、忌々しいが、京太郎が思いの外カッコよく見えた。

「でも、よくあんなの思いついたわね」

「まあ、バレーする時、自分のコートにボールが来たら、味方がボールをどう処理するのかと見るのが当然だ。だったら、これでも同じこと。味方がボールを取れるかどうかを知ろうと、自然に味方を見るはずだ。だが、前に出すと、秋田の攻撃に誰か気づいてしまう。

だから、全員の目線を後ろにする必要がある。だから、確実に壁にぶつかるようにしたんだ」

「へえ、すごい……」

僕もつい感心してしまう。そうだ、京太朗ってこうことを考えるのが好きだったな。

「ボールを持った相手を当てたということは、拙者らの中から誰かがコートに戻るってことでござるな」

「ああ、そうだね」

まあ、ここはジュンが妥当だと思う。メンバーの中で、足が一番速いから、当たる確率が低い。さっきのは、偶然だけど。この状況なら、まずは当てることよりも当たらないことを優先するべきだからね。

「よし、反撃するぞっ！道程っ！」

「だってさ、ジュン………えっ？僕？」

スーパードッジボール3

コートに戻った。序盤でアウトになったから、久しぶりどころか、初めての心地さえする。

「でも、なんで僕を選んだの？」

この場合は別段、僕じゃなくてもいいはずなのに。

「別に選んだ訳じゃない。そういうルールなんだ」

「どうということ？」

「アウトになった味方を復活させる時、先にアウトになった順に復活するってルールだ」

「そういうこと……じゃあ、僕を先にアウトにさせたのはわざとなんだね？」

「ああ、俺はあんまこのチームの個人戦力を知らん。だったら、こういう状況になった時を想定したら、一番やりやすいのは道程だからな」

やはり、この男は後先考えて行動できる奴なんだと再度実感した。

「それで僕を先に――」

「――って、後付けできるなあって今思った」

「じゃあ、その時は思ってたんだな?!」

訂正、ただ単に運が良くて言い訳が上手いだけみたいだ。

「喋ってる暇はないみたいだぞ？」

「そうか」

現状を確認。こっちは僕と京太郎そして秋田さん、向こうは委員長・山形君を中心に計5人。人数ならまず不利だ。

「何か作戦考えたか？」

「いまのところ。避けることで精いっぱいになるかもね」

「アタシもそれくらい」

しかも、ボールは2つとも3組が持つてる。やはり不利だ、圧倒的に。

「だがまあ、隙を開けてからだな」

「何かあるの？」

「ああ。とにかく、道程と秋田はアウトにならんようにしてくれ」

「分かった」

「オーケー！」

僕が了解の言葉を言ったと同時に相手からボールが飛んできた。

現状はいまだに進まない。ただ、ボールが行ったり来たりの繰り返しだ。

「あいつら、避けることに徹したから、なかなか当たらん」

3組の生徒がそう漏らした。そう、僕と秋田さんはただ避けることに集中している。たまに、キャッチすることもあるけど、京太郎の言う通り避けることに専念する。

「いけえ！」

3組の一番速い球を投げる生徒が投げてきた。

狙いは秋田さんだった。速いから、避けると逆に当たる可能性がある。でも、秋田さんの胸を目掛けて一直線に進む軌道を見て、秋田さんはそのボールを捕ることにしてみた。ボールは向こうが二つ持ってるけど、1つだけ飛んできた。

——ドンッ

しかし、鈍い音を立て、秋田さんはキャッチをし損ねた。

「ああっ」

秋田さんが跳ね返ったボールの行方を目で追う。

「うおおおおっ」

必死に追いかける。

「間に合えっ！」

——ガシッ

両手で地面スレスレのボールを見事キャッチした。

『すごい。京ちゃんっ!!』

——京太郎が

「ナイス！京太朗」

僕はつい、そう叫んでいた。

「ありがとう、東」

秋田さんも感謝の念を表した。

「いけええ！」

そのまま立ち上がり、ボールを持った敵に向かい迷わず投げる。
「くっ！」

狙われた人が苦肉の策でボールを投げた。

彼のボールは京太朗のボールと掠り、軌道を変え――

「うそっ？」

またもや秋田さんへと向かう。

「おおおおおお！」

必死に走る。

――ドンッ

「きゃっ」

そして、突き飛ばした。

『1組ゼッケン1番アウト！』

「ご、ごめん。北海。アタシのせいで」

「いや、秋田さんが残れてよかったよ」

――僕は2度目のアウトになった。

『そして、相手のボールをボールで防ぐ場合、そのボールは体の一部とみなすので、3組ゼッケン6番もアウトです』

結果、向こうもアウトみたいだ。

「それじゃ、後は頼んだよ。京太朗、秋田さん」

「ま、大丈夫だろう」

「そうだね。頼んだよ――福島さん」

人格が戻らないままの福島さんは、かなりやる気みたいだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7588v/>

カラーリーブ

2011年11月23日00時49分発行